

『旧大崎城』



▲小松帯刀 (1835～1870年)

くこの両者の間を取り持っていたのが四男の兼光である。

しかし、国兼の

復帰を願い出たが、取り入れられず、結果、肝付兼光は本家と絶縁し、島津氏の臣下となる。この時、本町の天子ヶ丘集落あたりを中心として『大崎城』を創建する。現在私たちの『大崎町』の『大崎』の名は、このころから文献に登場する。

ちなみにこの後1577年に馬場・丸尾・城内集落一帯に大崎城が創建されるが、これに対して肝付兼光が創建した大崎城は、現在『旧大崎城』と呼んでいる。

旧大崎城は東側を正面とし、西方に軍事施設を集結させ、『西迫』と呼び、後方を『後迫』とした。また、西迫から宮馬場に残る凹道は『駒馬場』と呼び、武士が馬を訓練させていた場所と言われている。

1475年から、現在の宮崎県串間市福島の櫛間城を拠点としていた島津氏支族である伊作久逸が、本家島津氏に反乱を仕掛けていた。この時、肝付兼光は島津11代忠昌に従軍している。そして討伐にあたって功績を上げた。

1483年に兼光は大崎城で亡くなるが、後を継いだ肝付兼固は、島津忠昌によって始良郡溝辺三十町を与えられ、1486年、兼固以下一門は大崎から溝辺に移住した。1534年に、兼固の後を継いだ兼固の子、肝付兼演は、島津家の家老となり、加治木

に移る。そして、1595年、豊臣秀吉の行った太閤検地によって、加治木から、喜入へと所領替えをさせられ、喜入肝付氏が誕生する。その後、江戸時代、薩摩藩では、島津御一門家の次の家格である『一所持ち』という家格で存続する。肝付尚五郎はその末裔ということになる。

話は難しくなったが、つまり小松帯刀、つまり肝付尚五郎の祖先を辿っていけば、大崎城創建者である肝付兼光に行き着くということだ。

NHK大河ドラマ『篤姫』最終回、帯刀が36年の人生の幕を閉じるシーンを見ていたが、皮肉にも、私自身がこの時36歳であった。36年間の人生のスケールの違いを比べると、何とも心境は複雑である。しかしながら、そんな帯刀と自分の住む大崎町にこんな接点があったのかと思えば、つくづく自分の町が誇らしい。地域の面白さは、こんな意外なところで発見される。これもまた『歴史を歩く』の楽しさなのである。

大崎町埋蔵文化財専門員

【内村憲和】

小松帯刀！

幕末、日本の近代化に大きく貢献した志士の一人である。

島津斉彬、島津久光に才能を見出され、若くして薩摩藩家老となる。薩摩藩の藩政改革に留まらず、薩英戦争後のイギリスとの友好関係、薩長盟約、そして、徳川家が政治の実権を朝廷に返上する、いわゆる『大政奉還』など、日本が近代化に向けて大きく前進する局面において帯刀の類いまれなる交渉力は不可欠であった。

帯刀は1856年に現在の日置市日吉町にある吉利の領主であった小松家に跡目養子

となつて家督を継承し、小松姓を名乗っているが、もともとは喜入領主・肝付兼善の三男で、肝付尚五郎と名乗っていた。そして尚五郎の祖先は、大崎町と深い関わりがある。話は尚五郎がこの世に生を受けるより361年前の1474年までに遡る。現在の肝付町高山にある高山本城は肝付本家代々の居城である。12代目の兼忠には、長男国兼、三男兼連、四男兼光、五男兼清の息子がいた。(次男は早くに亡くなっている。)父兼忠と長男国兼は不仲で、三男兼連はこれに乗じて国兼を領外に追放した。しばらく



▲旧大崎城本丸があったとされる一帯 (天子ヶ丘集落)